



episode.06

伝統的工芸品としての鶴田和紙

話し手 鶴田手漉和紙
の も と ま さ し
野元 政志さん (昭和28年8月15日生)

聞き手 鹿児島県立薩摩中央高等学校
1年 有村 優仁 1年 上村 美月
1年 栗須 桜花 1年 徳永 憲伸

「鶴田和紙の歴史」

宮之城は宮之城島津家があったでしょう。一般の下級武士とかの仕事として養蚕とか紙漉きとかってというのは島津家の奨励で始まったんだと思いますよ。だから桑の木や梶の木を植えさせたり。鶴田和紙は、今年で130年ぐらいですね。私で今4代目ですけど、明治25年ぐらいからかな。初代は旧宮之城町の柗野(くきの)って所がおふくろの実家なんですけど、そこで最初は漉きだしたみたいです。私のおふくろがこっち(さつま町^{こうし}神子)に嫁いだ時に道具を持ち込んでこっちで漉くようになったんですけど、本家は後継者がいなくて、ここだけが残ったってことですね。元々、旧宮之城町は紙を漉く所はたくさんあったみたいで平川地区辺りは、特に盛んだったみたいです。それから紫尾とか柗野も多かったみたいです。だけど、だんだん需要がなくなってきて、結局うちのところが一軒だけ残ったってことですかね。

今、この辺の高齢者の方も冬場、田んぼの代わりに「梶の皮剥ぎ」っていう、梶の皮を剥ぐ作業を経験した人は多いんじゃないかな。

「紙漉きは冬場の仕事」

紙を漉く時に、トロロアオイっていう植物から作った糊を水の中に散らすんです。これは何のためかという、水にある程度の粘り気を持たせるため。これを“ねり”というんです。この“ねり”があるから漉いた時に、簀桁(長方形の大枠に、すだれ状の道具「簀(す)」を敷いた道具)に少しの時間だけ水が乗ってくれるんです。乗っている間に漉き舟を動かして梶の繊維を縦横均等に散らさることができるんです。簀桁に水が乗る加減を見ながら繊維を均等に散らして、沈殿させていく。ね



りがないと漉いても、繊維をちらす前に流れて、繊維が団子状で残って凸凹した紙になります。水温が高いと、ねりの効きが悪くて繊維が散らないんです。だから、どうしても紙漉きってというのは、冬場の仕事。今は、科学のりと言って温度に関係ない糊もあります。ただ、伝統的な和紙となると、昔ながらの技法で。時期的には大体11月から3月ごろまでやります。めちゃくちゃ寒い時期ですね。でも一番寒い2月頃は、ねりが効いて一番仕事がしやすいですね。ただ、炭を焚いて手を温めたり、お湯を沸かして、手を入れたり温めながらやっていますね。

「若い世代の人たちへ」

昔は毎日朝から晩まで漉いていた。今はそんなに漉くことがない。今は、商業品というより工芸品がメインですね。色を着けてランプの笠やランチョンマットとかね。他にも、鶴田小や柏原小の6年生が自分たちの卒業証書を手漉きで作るためにやってきます。あと、出水の大川内中学校も学校に紙漉きの施設があって、そこに教えに行ったりしますね。

今年のかごしま国体・大会では、賞状は手漉き和紙でと県で決まっていたので、うちの鶴田和紙と蒲生和紙の二つで国体の賞状を漉きました。伝統的工芸品っていうものの価値だろうと思います。

うちは平成元年に県の伝統的工芸品の指定を頂きました。和紙というのは、火にも強く水に濡れても破れにくい、保管するにも丈夫で長持ち。「和紙は千年」「洋紙は百年」と言われているように、実際に1300年以上前の和紙が(奈良の正倉院に)保管されています。

日本には昔からずっと残っている良い物がたくさんあります。鹿児島県の伝統的工芸品も三十以上あります。だから和紙だけでなく、皆さんがいろんな所に行って工芸品に接してほしいです。今回、和紙の取材を通して、伝統的工芸品に関心をもってくればなっていうのが、私の望みですね。



聞き書きコラム

梶の皮剥ぎ

鶴田地区周辺では2月、梅の花が咲く頃になると行われた「梶の皮剥ぎ」。梶の木を刈り取り、窯で2時間ほど蒸して、皮を剥いでいく。剥いだ皮は、1週間ほど乾燥させ、和紙の原料となる。昔は梶を蒸す際、芋と一緒に蒸して食べることもあったとか。



梶の木



乾燥させた梶の皮